

**【2月の気象】**

2月上旬は1月下旬から続く1年で一番寒い時期です。暦では節分(本年は2月3日)を迎え、翌日の立春の名のごとく春へと進み始める頃となります。月の後半になってくると日本の南岸を通過していく低気圧(南岸低気圧)の影響で大雪になることもあります。

また、低気圧が日本海を発達しながら通過すると、暖かい南風が吹き、気温が上昇することもあります。立春から春分までの期間で、広い範囲に初めて吹く暖かい南よりの強い風を「春一番」として発表します。「春一番」が吹いたあとは冬型の気圧配置となる場合が多く、一転して北から寒気が流れ込むため注意が必要です。

2月は、気温の変化(寒暖の差)が大きくなる月です。農作物の管理には、週間天気予報、1か月予報及び早期天候情報等を活用してください。

ちなみに、1か月予報は毎週木曜日に発表しており、早期天候情報については、毎週、月・木曜日に情報発表日の6日後から14日後までを対象として、5日間平均気温が平年より「かなり高い」もしくは「かなり低い」となる確率が30%以上、または5日間降雪量が「かなり多い」となる確率が30%以上と見込まれる場合に発表します。なお、降雪量の予想による早期天候情報の発表は、11月~3月のみで、日本海側を中心とした地域が対象となっており、四国地方は発表の対象となっていませんが、中国地方に発表した場合は四国地方でも大雪の可能性も高くなる場合があるので参考にしてください。また、ホームページでの「早期天候情報」の更新は、発表日の14時45分までに行いますので、情報発表の有無の確認は14時45分頃以降にお願いします。

**【気象用語】降水と積雪・降雪**

大気中の水蒸気が凝結してできた雨滴や昇華してできた氷片、それらが凍結・融解してできた氷片・水滴等が地表に落下する現象又は落下したものを降水とします。ある時間内に地表の水平面に達した降水を、水の深さで表したものが降水量です(露・霜・しぶき・地ふぶき等の水と降水が区別できない場合はこれらと合わせて降水量とします)。

雪・あられ・ひょう等、水滴以外の降水を固形降水とします。固形降水が自然に積もり地面を覆った状態を積雪とし、その深さが積雪の深さです。

降雪の深さは、ある時間内に地面に降り積もった固形降水の深さをいいます(地ふぶきによる雪の深さを区別できない場合はこれらと合わせて降雪の深さとします)。愛媛県の大雪警報・注意報の発表基準は12時間降雪の深さが、警報は平地10cm、山地30cm、注意報は平地5cm、山地15cm以上になると予想したときに発表します。

松山地方気象台では、積雪の深さ及び降雪の深さは露場に設置した「積雪計」で観測します(写真)。観測用支柱に30度傾けて固定した感部から10秒間隔でレーザー光を発射し、雪面で反射して感部に戻るまでの位相差から感部と積雪面の距離を求めます(積雪の基準となる露場面には降雪板を設置します)。

露場は、測器を効率的かつ適正に配置するため、屋外に設けた平坦で開けた地面に芝草を植えて風通しのよい柵で囲んだ区画。



松山地方気象台 積雪計(レーザー式)